

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月30日現在

機関番号：32670

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720145

研究課題名（和文）梁啓超の文化構築と明治日本—変法運動から「新民」確立の過程を中心に

研究課題名（英文）Liang Qichao's Cultural Construction and the Meiji Japan: From the Hundred Days' Reform to the Establishment of "New People"

研究代表者

吉田 薫（YOSHIDA KAORU）

日本女子大学・文学部・学術研究員

研究者番号：30571400

研究成果の概要（和文）：

本研究は、清末中国の改革者でジャーナリストでもある梁啓超と明治日本の関係について考察したものである。第一に、梁啓超が来日後「新民」思想を構築する過程について考察した。具体的には、梁の死生観から宗教、墨子、中国古来の文化への関心に至る過程を読み解き、また章太炎等の思想家についても検討した。さらに、康有為の従兄康孟卿や同門何樹齡等、梁啓超の周辺人物についても関係資料の調査・発掘を行った。本研究を通して、康有為、梁啓超らの変法運動とその後の活動内容について明らかにし、近代日中関係、文化交流においても、新たな様相と意義を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：

This research focuses on the relationship between Liang Qichao, a reformer and journalist of the late Qing China, and the Meiji Japan. It traces the process in which Liang Qichao constructed the thought of "new people" after he came to Japan, by examining his view of life and death, religion, Mozi and ancient Chinese culture, as well as his relationship with other intellectuals such as Zhang Taiyan. In addition, it pays special attention to the people around Liang Qichao who actively participated in his reform activities, including Kang Mengqing—Kang Youwei's cousin, and He Shuling—Liang's fellow reformer. My research discovered many new materials and facts on these figures. As a whole, this project not only demonstrates on a solid ground the specific activities of Kang Youwei and Liang Qichao during and after the Hundred Days' Reform, but also reveals at a deeper level the significance of the relationship and cultural exchange between Japan and China in the modern period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：梁啓超、康有為、康孟卿、何樹齡、変法運動、新民、明治日本、漢学者、近代中国、日中関係、文化交流

### 1. 研究開始当初の背景

康有為と梁啓超が、変法運動を推進する中で、報刊（新聞・雑誌）の刊行と言論の発信に力を入れたことは画期的であった。梁啓超のジャーナリストとしての優れた才覚は、変法を進めながら、また同時に中国近代出版文化をも牽引していくものであった。康有為、梁啓超らは報館（雑誌・新聞社）活動を通して中国国内に積極的に海外の知識を紹介した。さらに、変法の模範として幕末明治の日本に強い関心を持ち、日本の改革を中国の変法案に活かしたいと考えていた。1898年9月に戊戌政変が起こり、康有為、梁啓超とも日本へ亡命、梁啓超は14年あまり日本に滞在、梁啓超の主要な活動拠点は日本となった。この間、梁啓超は多くの著述を発表し、それは日本の多方面とかわりをもっていたため、梁啓超と日本についての研究は、早い時期から各分野で研究がなされてきた。ただその多くが主に梁啓超の著書『飲冰室合集』に拠って進められてきたため、梁啓超の活動については未だ明らかになっていない部分も多い。

研究者はこれまで梁啓超研究を進める上で、改めて梁啓超と明治日本のかかわりを検討してきた。拙稿「梁啓超対日本近代志士精神的探究と消化」（『中国現代文学研究叢刊』第2期、2008年）では、梁啓超が明治の幕末志士を意識しながら如何に新たな思想を構築していったかを提示し、拙稿「梁啓超と『太陽』雑誌」（『学術研究』第12期、2008年）では、梁啓超ならびに梁の同門何樹齡と『太陽』編集者岸上質軒の関係を明らかにした。今回の研究課題においては、特に梁啓超の活動に参加しながらもこれまでほとんど

注目されてこなかった人物についてさらなる調査を進め、またその過程で新たな視点で梁啓超の活動と思想、ひいては当時の日中関係の様相について検討を深めていきたいと考えた。

### 2. 研究の目的

梁啓超ら変法派の報刊『時務報』（上海、1896年）、『知新報』（澳門、1897年）、『東亜報』（神戸、1898年）、『清議報』（横浜、1898年）、『新民叢報』（横浜、1902年）を精査し、特に、これら報館（雑誌・新聞社）の活動にかかわった人物についての資料も調査する。梁啓超は日本の新聞・雑誌に早くから注視しており、特に明治時代の総合雑誌『太陽』に注目していた。さらに日本、中国各地で資料調査・収集を進めながら、梁啓超の具体的な活動内容を明らかにする。また梁啓超の思想については、梁啓超の著書と関連資料を丹念に読み解き、明治日本において、「新民」構築に至る道程を検討する。

### 3. 研究の方法

（1）明治時代の政治小説『佳人之奇遇』の作者柴四朗（東海散士）、ならびに柴四朗と関係の深い谷干城について、関係資料の調査・収集をした。これについては研究成果である「康孟卿の翻訳作業とその周辺——戊戌政変から『清議報』刊行までを中心に——」（『中国研究月報』第65巻第10号、2011年）でも論じたが、『清議報』所載の『佳人之奇遇』の翻訳について、康有為の従兄康孟卿が『佳人之奇遇』の翻訳にかかわっていただけでなく、梁啓超と『佳人之奇遇』の出会いには、漢学者山本憲や谷干城との関係も考えられるのではないかと思うからである。

(2) 高知市立自由民権記念館にて、山本憲のご遺族より寄託された「山本憲関係書簡」の一部を閲覧し、梁啓超の変法運動ならびに康孟卿やその他梁啓超関係の活動内容について検討した。また自由民権記念館関係の研究者からご教示をいただいた。

(3) 九州各地にて、明治時代の言論界の状況やジャーナリスト、革命家関係者についての資料を閲覧・調査し、また各機関においてご教示をいただいた。特に宮崎滔天については、九州における研究状況を知ることができ、有益であった。

(4) 梁啓超と関係の深かった犬養毅と柏原文太郎について、犬養木堂記念館ならびに成田山霊光館、東京大学法学部にて関係資料の調査・閲覧を行った。

(5) 神戸では、兵庫県公館憲政資料館や神戸市中央図書館、華僑博物館において、『東亜報』他康有為・梁啓超とかかわりのある中国人関係資料について調査、閲覧した。

(6) 中国では、北京や広州、澳門で研究関係資料の調査・閲覧を行った。特に澳門においては、これまで注目されてこなかった人物や先行研究について知ることができ、非常に有益であった。北京や広州においては、これまでの研究をまとめる上で、最終的な資料収集、および研究関係者との交流を行った。

(7) その他、梁啓超の著作ならびに古典から近代に至るまでの関係資料を精読し、梁啓超の活動及び思想をまとめた。

#### 4. 研究成果

以下の研究成果をまとめた。

(1) 梁啓超は中国にいる頃から幕末志士に強い関心を抱いていた。康有為の私塾万木草堂で、康有為、梁啓超は、吉田松陰の『幽室文稿』を読み、さらに梁啓超は「記東侠」の一篇をしたため、幕末志士を改革者の模範として中国の読者に紹介した。戊戌政変後、梁

啓超は来日し、明治時代の日本社会で様々な影響、刺激を受けた。その過程で、梁啓超は新しい中国国民「新民」像を提唱するのであったが、軍国主義が隆盛を見せる世では、死生観を確立する必要があると考えた。その梁啓超の思想遍歴と新たな文化構築について、論文「“新民”与“死生観”的糾纏——梁啓超從“宗教”到本土文化的關注」(『東岳論叢』第5期、2011年)にまとめた。

梁啓超は元来、「宗教」や「魂」を野蛮な文明と見なし、それらに強い警戒感を抱いていた。一方、中国古来の思想には、世界各国の宗教とは異なり、系統的に死後の世界について語るものがなかった。そこで梁啓超は、改めて仏教と墨子思想に着目した。しかしながら、梁啓超は人間がこの世に身を置いて効用を発揮することを重視していたために、仏教の輪廻を語る際、梁はあくまで「無我」ではなく「有我」にこだわった。墨子については、心理学や催眠術といった近代の「科学的な」学問を援用しながら、墨子の新たな意義について検討した。梁啓超は近代科学思想にふれる中で、「無我」や精神世界にも一定の理解を示すようになり、さらに、中国には「精神文化」において西洋と対峙できる中国固有の文化があることに、新たな価値を見出すのであった。

(2) 「山本憲関係書簡」を読み解くことにより、以下の点を明らかにすることができた。

① 康有為の従兄康孟卿が大阪の漢学者山本憲の助けを得ながら、山本の私塾梅清処塾で日本語を学び、梁啓超ら変法派のために日本の新聞を翻訳していた。

② 『清議報』連載の『佳人之奇遇』の翻訳については、これまで梁啓超が誰かの協力を得ながら成し得たのではないかと考えられていた。「山本憲関係書簡」には、康孟卿が明治の政治小説『佳人之奇遇』の一部を翻訳し

ていたことが記されている。これにより康孟卿が翻訳を担当した可能性がある。

③ 戊戌政変が起こった時の在日中国人の動向について。

④ 梁啓超が横浜で発行していた『清議報』の業務は、そのほとんどが康孟卿によって担われていた。

⑤ 中国における『清議報』の流通は、基督教会の協力を得ていた。

⑥ 横浜の大同学校の運営について。康有為・梁啓超は山本憲を教員として招聘することを強く願っていた。

⑦ その他、日中間の外交政策により康有為が離日する際の状況について等。

これらは論文「康孟卿の翻訳作業とその周辺——戊戌政変から『清議報』刊行までを中心に——」『中国研究月報』第 65 巻第 10 号（2011 年 10 月）にまとめた。

（3）康有為、梁啓超の同門である何樹齡について調査を進めた。中国及び日本で関係資料を収集し、現在まとめの段階に入っているところである。何樹齡は康有為、梁啓超とはまた異なった変法思想と活動を試みていたことが明らかになった。

その他、上述した研究の方法での作業を通し、研究者が長年取り組んできた梁啓超研究を最終的にまとめていきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 吉田 薫、「“新民”与“死生観”的糾纏——梁啓超從“宗教”到本土文化的關注」、『東岳論叢』第 5 期、76～87 頁、2011 年（『同』第 8 期、126 頁、2011 年に補注追加）、査読

有

② 吉田 薫、「康孟卿の翻訳作業とその周辺——戊戌政変から『清議報』刊行までを中心に——」、『中国研究月報』第 65 巻第 10 号、1～14 頁、2011 年、査読有

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉田 薫 (YOSHIDA KAORU)

日本女子大学・文学部・学術研究員

研究者番号：30571400

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし